



■ 巻頭のことば

神話の魅力 長野とダ子 | 1

■ 特集1 なせ神話なのか

近代国家と『古事記』三浦佑之 | 6

■ 特集2 神話を語る

古事記を語る 片岡輝 | 15

■ 特集3 私の語った神話の世界

「ふじ曼」を語る 末吉正子 | 26

私の語った神話の世界—古事記— 須山優子 | 31

神話を語る 小坂真理子 | 35

アイヌの物語世界カムイユカラ(神謡)との出会いから  
墨谷真澄 | 39

■ 特集4 多様な民族と神々

カマキリとバオバブとアフリカの神話

さくまゆみこ | 44

■ 連載 私の読書ノートから

語りの源流への旅その二十八 中国のSF

片岡輝 | 52

■ 連載 子どもに語る

モノクケ・フイールドノート(妖怪野帳)

第五回学校の怪談はなくなった？ 堀田穰 | 62

■ 各地の活動から

こじばが育てるいのちと心 竹丸富子 | 68

■ 育成講座

語り手を育て聴き手を育て

伊知地晃子/菅野智子 | 72

お知らせ | 78

表紙イラスト 寺内重夫  
アート・デザイン ショーン 片岡輝  
表紙タイトル英訳 宝田綾子  
カット 平湯空子・他

# 近代国家と『古事記』

三浦佑之 千葉大学名誉教授・立正大学教授・口承文芸研究者・東京都

## 1 『古事記』と『日本書紀』

日本神話といえは『古事記』と言われるようになったのはずいぶん新しい。そもそも、本居宣長が『古事記伝』を書き上げ、その普及版ともいえる本文『訂正古訓古事記』が弟子の長瀬真幸の手を縫って完成しなければ『古事記』の一般への普及というようなことは考えられないことであつた。とすれば、それは十九世紀以降のことであり、大雑把に言えば、尊皇攘夷論と国学が結びつくなかで『古事記』という作品は人びとの前に姿を見せたというふう to 考えて

よからう。それとて『古事記』が単独で存在するというのではなく、すでに人びとによく知られていた『日本書紀』がそばにはいたのだし、権威はそちらに存した。『日本書紀』は律令国家の正史であり、成立以来、王道を歩んできた書物であつた。そうしたなかで『古事記』は近代という時代に思わぬ役割を課せられることになつた。それは、維新という名のクーデターによって政権を奪取した明治政府が選択した近代天皇制を下支えするという役割であつた。支配者にとつて、治める国を持続させるためには二つの力が必要となる。その一つは権力（法）であるが、それだけでは国家への求

位置していなければならなかつたのである。そのため頼りたのが、国家の正史である『日本書紀』であり、新たに求められるのは、法（権力）の対局に位置するもう一つの力としての幻想（歴史＝神話）である。その国が過去から未来へと揺るぎなく受け継がれるものであることを示すことによつて、国家は持続を可能にする。そこで求められるのが、起源を語る神話であり、連綿と続く歴史だということになる。

新たな国家の創建を語る場合のもう一つの神話は、未開の地の開拓や既存国家の破壊からの再生というかたちになるが、この国の神話（歴史）が好む国家像は、「継続・持続」というあり方であつたらしい。明治政府の場合、薩摩と長州を中心とした地方武士たちによるクーデターによつて国家は打ち立てられたわけだが、それが継承による正統性を主張するために、「錦の御旗」として天皇に頼る以外に術がなかつたのである。そのため、初代天皇から連綿と続く国家の歴史に自分たちが連なっていることを具体的に示す必要がある、その起源にはアエラス（天照大神／天照大神）から始まる高天の原の神がみがある。

心方や忠誠心を保持することができない。ことに簞籠國家にとつては自らの正統性の主張こそが國家として存続するために不可欠な方途であつた。そこで求められるのは、法（権力）の対局に位置するもう一つの力としての幻想（歴史＝神話）である。その国が過去から未来へと揺るぎなく受け継がれるものであることを示すことによつて、國家は持続を可能にする。そこで求められるのが、起源を語る神話であり、連綿と続く歴史だということになる。

新たな國家の創建を語る場合のもう一つの神話は、未開の地の開拓や既存國家の破壊からの再生というかたちになるが、この國の神話（歴史）が好む國家像は、「継続・持続」というあり方であつたらしい。明治政府の場合、薩摩と長州を中心とした地方武士たちによるクーデターによつて國家は打ち立てられたわけだが、それが継承による正統性を主張するために、「錦の御旗」としての天皇に頼る以外に術がなかつたのである。そのため、初代天皇から連綿と続く國家の歴史に自分たちが連なっていることを具体的に示す必要がある、その起源にはアエラス（天照大神／天照大神）から始まる高天の原の神がみがある。

## 2 神話画の拡散

近代日本絵画のなかに「歴史画」と称される分野がある。歴史的な人物や出来事を題材にした絵画で、明治二十年代から三十年代がもっとも隆盛していたと美術史家の山梨俊夫は述べている（描かれた歴史 日本近代と「歴史画」の熾場）グリュッケ、二〇〇五年）。日本画を中心とした歴史画は、山梨によれば、「国家的な政策」と呼称しながら展開し、「天皇を頂点とした新しい上下関係」を構築するための「忠孝を軸にする倫理観」の涵養、「自国の歴史編成と結びついた歴史教育の一環を絵画に背負わせる」こと、「日本らしさ」の發揮などを意図したものであった。それら歴史画のなかで、「古事記」や「日本書紀」の神話や伝承を題材にした絵画が数多く制作された。

そして、こうした題材を用いて近代国家の体制や思想を国民に浸透させようとしたのは、視覚的な効果をねらった絵画だけではない。学校教育のなかに深く浸透し、歴史教育や音楽教育、そして国語教育のなかで、数多くの神話・

代の神話を創る作家が、近代絵画における歴史画（その一部としての「神話画」）のなかにもはつきりと見いだせる。そのことに気づいたのは、二〇一〇年秋に島根県立石見美術館（益田市）で開催された展覧会「神々のすがた 古事記と近代美術」であった（島根県立石見美術館の開館五周年記念展として開催され、展示期間は二〇一〇年九月十七日～十一月七日。展示品については、図録「神々のすがた 古事記と近代美術」島根県立石見美術館、二〇一〇年）。そこには戦後の作品も一部展示されていたが、ほとんどが明治初期から戦前までに描かれた神話や伝承を題材とした日本画・洋画・版画および彫刻であった。それらを一堂に展示するという試みは、管見の範囲ではとても希なものだ。というのも、奉国一致を勧めたり戦意を鼓舞したりするために制作された国家的な芸術は、戦後はいかがわしい作品として忌み嫌われるようになり、展示もままならなかったからである。それは戦後の検定教科書から神話が排除されたのと表裏の関係にあるとみてよい。

展示された作品は九〇点で、当時の神話画を網羅したものではない。集められた基準も明確ではないので普遍的な

伝承が教材として用いられることになった。それらに共通する主要な題材として、天の岩屋・素戔嗚尊の大蛇退治・因幡の白兔・神武東征・日本武尊（熊襲討伐と草薙剣・弟橘媛の入水）などが選ばれ、さまざまなかたちで教科書を彩るものになったのである。

このような動きに呼応していると思われるのが、「記紀」という呼称の出現である。説明するまでもなからうが、「記紀」というのは、「古事記」と「日本書紀」とを並列する場合の略称である。字数が少なく語呂がいいというだけではなく、「記紀」という呼称が、「古事記」と「日本書紀」という、本来まったく別の作品として存在した二書を融通無下に混ぜ合わせるのに都合がよかつたからである。つまり、両者の都合のよい部分を切り取ってつなぎ合わせ、それを「記紀」神話として実体化させ、教科書や読み物を作り、そこで作られたイメージが絵画や音楽となって拡散されてゆくことになった。そうした認識が、出雲神話の本質を見失わせるという害毒を垂れ流すなど、今も「古事記」研究の大きな弊害になっているとわたしは考えている。

そうした「古事記」と「日本書紀」とを混ぜ合わせて近

傾向として述べることはできないが、展示品を鑑賞し図録を確認した上でいうと、スサノヲ（須佐之男命／素戔嗚尊）のヲロ子退治、神武天皇の東征、ヤマトタケル（倭建命／日本武尊）と草薙の剣、神功皇后の朝鮮征伐が神話画の四天王と呼ばれる人気の題材である。そして、それらの作品に切り取られた場面や作品の題名をもとに断片してみると、その多くが「日本書紀」の記述を踏まえて描かれているとみなせるのである。これは国定教科書の題材とも重なるのだが、いずれの話も逆賊との勇猛な闘いや領地拡大のための遠征として解釈しなおせる内容であり、近代国家の国策に呼応しやすい題材だったといえるだろう。

一方、それとは別に、イザナミ（伊耶那美命・伊弉諾尊）・イザナミ（伊耶冉尊）の国生み神話や天の岩屋神話、ウミナチ（海佐知毘古／海幸彦）・ヤマナチ（山佐知毘古／山幸彦）神話のように、そのままではロパガンダには直結しにくい場合もある。その時には、話の展開がもしらいつか終になりやすい場面があるとかの理由で、「古事記」を選んだり「日本書紀」を選んだりするようにみえる。たとえば天孫降臨の場面で、先導者とし

て降りてきたウスマ (天守受売命/天御女命) とサルタビコ (猿田毘古神/媛田彦神) との対面を、安田毅彦「天之八衢」(一九三九年) や小堀綱吉「天孫降臨図」(創作年末詳) が描いている。どちらも『日本書紀』に伝えられた胸乳をあらわにしたウスマを描くのだが、国威高揚の意図はあるとしても、それよりは総の構図としてのおもしろさがあると思われるのだと思われる。

現在ならば、より有効だがかなり大衆洗脳の方法はいくらも存在するが、この時代にはデジタルな絵画作品が大きな役割を果たしたのである。そうしたなかで、青木繁という洋画家も、短い作家生命のなかで立て続けに「黄泉比良坂」「大穴牟知命」「日本武尊」「わだつみのいるこの宮」などの作品を描いているのだが、いわゆる国威発揚を目的とした神話画とは性格が違うという点は興味深い。ほかの作家たちがほとんど対象としない出雲神話の主人公「大穴牟知命」を題材とした作品があるのは象徴的である(三浦「取れし者」青木繁と「古事記」『古代研究』青木社、二〇二二年)。

- 第一期 国定教科書 (尋常小学読本・高等小学読本) 一九〇三 (明治三六) 年八月
- 第二期 国定教科書 (尋常小学読本、通称「ハタゴ読本」) 一九〇九 (明治四二) 年九月
- 第三期 国定教科書 (尋常小学国語読本、通称「ハナハト読本」) 一九一七 (大正六) 年十一月
- 第四期 国定教科書 (小学国語読本、通称「サクラ読本」) 一九三二 (昭和七) 年十一月
- 第五期 国定教科書 (よみかた/初等科国語、通称「アサヒ読本」) 一九四一 (昭和一六) 年二月
- 第六期 国定教科書 (くぐく/国語、通称「いこ読本」) 一九四七 (昭和二二) 年二月

絵画以上に大きな役割を果たしたのは教科書であった。将来をなす子どもたちに愛国観念を植えつけることは、今もこの国でも行われていることだと思いが、近代日本国家は、教科書を国定化することによってすべての子どもたちに、唯一絶対の神話と歴史を与えていったのである。教科書は、一九〇二 (明治三五) 年に起きた教科書疑獄事件によって、それ以前の検定制から国定制度へと転換し、戦後の一九四九 (昭和二四) 年に検定制度に変わるまで続いた (粉川宏『国定教科書』新潮選書、一九八五年)。おそらく、教科書疑獄というのはいつの契機にか過ぎず、明治政府の方針として教科書の国定化は、とうぜん考慮されていたことではなかったかと推察される。そして、一九〇三年から国定教科書が採用され、以降、国語教科書でいえば、六度の改訂作業が行われた。神話教材を採用した国語教科書を取りあげると、その六回の改訂作業は次の通りである。

【表】国定教科書に載せられた神話

神話/期別	一期	二期	三期	四期	五期	六期
国生み神話					5年	
天の岩屋		3年		3年	3年	
素戔嗚尊						3年
八岐のをろち			5年		3年	
因幡の兔/白ウサギ	高1年					
		2年			2年	
			2年			
				2年		
						2年

巻に記されている伝承などは除外している。また、掲載した表のなかの第一期のところに「高1年」とあるのは、高等小学校第一学年の教科書のことである (第一期教科書を「国定教科書と神話」(三浦編『歴史と古典 古事記を読む』吉川弘文館、二〇〇八年) と題して論じたことがあり、詳細はそちらにゆずる。

少彦名神	3年	3年	3年				
にぎのみこと	3年	3年	6年				
皇國の姿	3年	6年	6年				
出雲大社 (國譲り)			6年				
海幸・山幸	3年	3年	3年				

第一期の国定教科書は、慌ただしく編纂されたらしく使

用期間も長くはない。しかも、表を見ればわかるように、

神話は「因幡の白ウサギ」が高等科一年の教科書に採用さ

れているに過ぎず、尋常小学校(四年間)のあいだに神話

は一つも用いられていない。ちなみに、「因幡の白ウサギ」

という題材は神話のなかではもっとも長期間にわたって使

用され続け、戦後の検定教科書では中断していた神話教材

が復活した二〇一〇年以降の教科書では、この神話があっ

とも採用数が多い定番教材となっている(「因幡」とい

国名は律令国家の表記を採用しているが、この神話は「古

事記」にしか載せられておらず、その表記は「稲羽の素戔

である)。

第二期の国定国語教科書の編纂作業には児童文学者の蔵

谷小波がかかわり、神話や昔話などの読み物が一気にふえ

#### 4 「記紀」という呪縛

始めているので、採用期間はく短い。そして、戦後の検

定教科書においては、二〇一〇年に復活するまで、神話教

材は半世紀のあいだ封印されることになったのである。

話に「古事記」と「日本書紀」とを折衷するかたちで表現

された、そのこともあって「記紀」という呼称が定着するこ

とになった。それは、「古事記」という作品をまるで「日

本書紀」と並ぶがごとくに扱っている点で、大きな誤解を

生じさせることになったのである。本来は、「日本書紀」と

「日本書紀」というのは、古代律令国家を支える歴史とし

て、中国の史書を模範とし、紀・志・伝の三部から成る

「日本書」のうちの「紀」であった。結局、並行して試み

られたはずの「志」や「伝」は完成しないままに収束し、

「純日本紀」以降、国家の正史としては「紀」だけが編ま

たのが特徴である(三浦、「国定教科書と神話」前掲)。国

語に限って言うと、第三期の内容は第二期とほぼ同じで、

神話や昔話教材に基づいた読み物を重んじる傾向が続き

れる。ところが、神話に関していうと、表を見れば一目瞭

然、第四期に神話教材が急激に増加し第五期に受け継がれ

ていることがわかる。そのはじまりは一九三三年のことだ

が、ここからは、近代国家が神話をどのように利用してい

こうとしたかということがわかるのではないかと思う。ま

さに、戦争へと突き進む時代を象徴していると言ってい

だろう。その第四期と第五期とを比べてみると、使われ

ている題材も、「出雲大社」が「国生み神話」へと変更され

ただけで、他はまったく同じである。この、「オホクニヌシ

(大國主神)が天つ神に敗れて国を譲り渡す神話から、イ

ザナキ・イザナミによる国生み神話への変更が戦争のまっ

ただなかかに行われるというのは、勘繰ってみるとなかな

か意味深長ということになるか。

海幸・山幸の神話だけが受け継がれた第六期の国定教科

書は、検定教科書へのつなぎのようなかたちで戦後の

一九四七年に出された。一年後には検定教科書が使用され

れることになった。それに対して『古事記』は、律令国家

の求めた歴史書とは別のところで存在したと考えられる

が、その素性は定かではない。上巻に付された「序」は、

おそらくのちに権威化のために加えられたのであり、天武

天皇とも稗田阿礼とも太安万侶ともかわらない神史とで

も呼んだほうがいい書物であつたとわたしは考えている。

そのようにでも考えなければ、同じ時代に『古事記』と

『日本書紀』とが共存することを納得がいくように説明す

るのはむずかしい。

たとえば、いわゆる出雲神話と呼ばれる部分を取り上げ

ると、『古事記』上巻の三割以上を占めているのに対して、

『日本書紀』では、その出雲神話をまったく語ろうとしな

いのである。なぜそのような違いが生じるのかといえば、

そもそもあり方が違っていると考えるべきでない。『日

本書紀』は出雲を語りたくないであり、『古事記』は出

雲の神がみの滅びを語りたくないという使命感の

ようなものに支えられているのではないかとわたしは考え

ている。そして、『日本書紀』は、律令国家の正史として

存在するわけで、そこから考えれば、律令国家にとつて出

「記紀」という呼称を否定し、『古事記』と『日本書紀』とをまったく別のところに位置づけるという作業を地道に行うことが必要である。道ははるかに遠く険しいのだが。

\*

ここでは、近代において『古事記』が受けてきた受難と  
もいえるあり方について述べてきた。一方、『古事記』の  
始まりの時代に目を向ければ、文字によって書かれた『古  
事記』の前には、音声による語りの世界が広がっていたの  
であり、それが『古事記』の神話を成り立たせているとい  
うことを述べる必要はないのに、すでに紙幅も尽きま  
うとしてしまっている。ただ幸いなことに、そうした「語り」につ  
いてのわたしたしなりの考えは、本誌『語りの世界』第  
四五・四六号（二〇一七年）に、「古代の語り―その  
表現と構造―」と題した講演原稿を掲載していたので  
ある。 (あうら・すけゆき)

雲神話を語る必要はなかった、あるいは語りたくなかった  
ということ明かしている。一方の『古事記』には、出雲  
の神がみを語らなければならないという明確な意図を感じ  
させる。そこに、両者の本質的な相違が浮かび上がって  
るのである。このあたりの問題については、わたしの最新  
の研究をまとめた『出雲神話論』（講談社、二〇一九年）  
をぜひ一読いただきたい。

近代国家は、天皇制を称揚しようとして『古事記』と  
『日本書紀』とを同列に位置づけ、「記紀」なる呼称を用い、  
そこに描かれている神話を利用しながら国家を支える基盤  
を磐石なものにしていった。ここでは、『古事記』と『日  
本書紀』は区別されることなく、国家の歴史書として持ち  
上げられてしまったのである。『日本書紀』は成立の段階  
からそうした性格をもっていたのだからいとして、『古  
事記』にとってはとんだ災難といえる事態が、近代におい  
て生じたのだということになる。  
今から、そうした考え方を覆すのは困難なことではある  
が、それがなされない限り、『古事記』の真の理解には到  
達しえないだろうとわたしは危惧している。そのためには

### あじがき

絵本作家の「声で伝わるもの  
があります。是非読み聞かせて」  
という語を聞きました。声の力  
と「語り」を聞く時、声の調子や微  
妙な間、ちょっとした体の動き  
や目線などの諸々も含わせて語  
り手の思いを受け取り、感動し  
ているのだと思います。(恵つて  
いることが伝わる)語り手とし  
ては嬉しいような怖いような言  
葉です。  
(恵)

神話が政治的に利用された時  
代を経験した昭和世代の私は、  
いまだに神話に対して根強い不  
信感を引きずっている。魂の源  
が揺らぐのは、不幸だと思っ  
て、世界を席巻している愛国心  
を称揚する自国中心主義の風潮  
へのアレキス・ド・マリスの切り  
札だと確信している。神話を親  
和と重ねたい。  
(編集長)

### 語りりの世界 第六号

発行日 二〇二二年一月一日

編集 片岡輝

宝田優子

三田村慶春

山田悦子

山本亘子

発行 NPO法人語り手たちの会

〒一七一〇三三東京都豊島区目黒二一九四F

TEL:03-5711-9411 FAX:03-5711-9411

出版物メールでの申込

発行人 片岡輝

制作 オリオン出版

電話 〇三・五三七六・三八一

印刷 株式会社新協

電話 〇三・五九八一・九四七